

星野先生「人新世」悪夢のシナリオの録画視聴の感想

富樫豊主催による研究談話会における思想的交流を通じた人間存在の諸相に関する省察 (4)

A CRITIQUE OF THE RECORDED LECTURE BY PROFESSOR KATSUMI HOSHINO: THE NAUGHTMARE SCENARIO OF THE ANTHROPOCENE

Reflections on the Human Condition Through Dialogical Engagements with the Transdisciplinary Research Colloquium hosted by Dr. Yutaka Togashi, Part 4

岡田 成幸¹, 川崎 一郎², 橘 美知子³, 神田 順⁴, 熊澤 栄二⁵

Shigeyuki OKADA, Ichiro KAWASAKI, Michiko TACHIBANA, Jun KANDA, and Eiji KUMAZAWA

¹北海道大学名誉教授, 工学博士, 地震防災計画学

Hokkaido University, Professor Emeritus, Doctor of Engineering, Earthquake Protection Planning

²京都大学名誉教授, 理学博士, 地震学

Kyoto University, Professor Emeritus, Doctor of Science, Seismology

³滋賀大学名誉教授, 芸術学修士, 芸術学

Shiga University, Professor Emeritus, Master of Fine Arts, Science of Art

⁴東京大学名誉教授, 工学博士, 建築構造学

University of Tokyo, Professor Emeritus, Doctor of Engineering, Architectural Structure Engineering

⁵石川工業高等専門学校, 教授, 博士(工学), 建築論

Institute of National College of Technology, Ishikawa College, Professor, Doctor of Engineering, Architectural Theory

要約

本論文は研究談話会 E-mail 往復書簡シリーズの第4弾であり、星野による講演「人新世—悪夢のシナリオ」の録画視聴を通じて、人類の絶滅をめぐる哲学的・倫理的課題を批判的に考察したものである。星野からは「人類はすでに大量絶滅の初期段階にある」とする強いリアリズムが提示されている。それに対して岡田は星野の著書『人新世の絶滅学』と比較し哲学的対話の継続の必要性を訴える。さらに、未来世代への責任、文明モデルの再構築、Deep Ecologyの限界など、委員による多様な視点から絶滅の問題を掘り下げ、絶滅の過程における倫理的選択と価値判断の重要性を浮き彫りにする。本稿は、気候危機時代における人類の存在意義と行動原理を再考するための一つの試論と位置づけられよう。

Keywords: Anthropocene, Philosophy of Extinction, Responsibility to Future Generations, Deep Ecology

人新世, 絶滅哲学, 未来世代への責任, ディープエコロジー

I. 星野克美先生の特別セッション

研究談話会と平行して、人類の社会システムを主として地球温暖化現象から学際的に議論する「人新世生存実践研究会」が星野克美先生を主催として月1回の開始頻度でリモートにより実施されている。2023年11月29日(火)に以下のタイトルによる星野先生の講演(1時間)が行われた。

「人新世」悪夢のシナリオ ~A. Guterres, 地獄は時僕の門を開いた~
星野先生のプレゼンは膨大な資料を的確にまとめられ、それらを下にした先生の主張は明確で刺激的である。

その後、参加者による熱い討論が約2時間続けられた。私は残念ながら所要により参加できなかったが、その後配信されてきた当日の録画を視聴し、感想をメールで談話会のメンバーにお送りし、対論が始まった。

II. 星野先生「人新世」悪夢のシナリオの録画視聴の感想

本テーマに関する討論は、本論文集の熊澤栄二先生の前稿でも取り上げられております。そこでは主に熊澤 vs. 岡田の討論が主として取り上げられており、本稿では、それ以外について集録しています。熊澤 vs. 岡田の討論については、以下の熊澤先生の前稿をお読みください。

熊澤栄二・岡田成幸：哲学と倫理の分水嶺(2025)

■2-1. 岡田→皆さま:星野先生のご講演感想

2023年12月2日(土) 11:35

皆さま

当日は所用のため、リモートに参加できませんでしたが、録画を視聴させていただきます。

富樫先生から感想を求められ、星野先生のプレゼン・質疑討論についての感想をレポートにしましたので、ご笑読頂ければ幸いです。

富樫先生 外岡先生

動画有り難うございました。いつもに増して刺激の多い会でしたね。レポートは星野先生と討論された方々に向けて書きましたので、その方々にも転送頂けると有難いです。

失礼な内容でお送りするの躊躇するところもあるのですが、議論好きの先生方故に、お許し頂けるのではと思っています。また、議論が盛んになれば幸いです。

熊澤先生、神田先生、鈴木様、佐久間先生、川崎先生、当日は面白い議論でした。私の見解には異論百出だと思います。盛り上げて下さい。

■2-2. 岡田→皆さま:星野先生の録画視聴の感想(全文)(岡田■2-1.に添付のファイル)

富樫先生から感想を求められました。素直な気持ちを発露するのはあまりにも失礼かとは思いましたが、研究談話会の設立趣旨と同談話会におけるこれまでの討論スタイルの道程に照らし、先生方(特に星野先生)の寛大さに甘えさせていただくことといたしました。お許し下さい。全体を通しての感想をまず述べさせていただきます。私の中のモヤモヤを払拭させたく、直接的で大変に失礼な物言いになってしまっていることを、表現力の乏しさ故かと一笑に付されご海容頂けること、切にお願い致します。

星野先生への質問タイムにおいて、星野先生が提示されたテーマをどう理解したら良いかという点に集中した大変に興味深い議論が展開される予感がありましたが、しかし途中から、聴視者の先生方が星野先生との議論を避けられ、ご自身の感想を披露されるにとどまってしまったように私には映りました。博識に裏付けられた星野先生の主張があまりにも強烈なためであったと思われます。今回のご発表の星野先生の論点はただ一つ、「人類はもう駄目だ。大量絶滅の初期段階にすでに入ってしまったのだから。君たち、そのことにまだ気づいていないのか!認識が甘い!!」失礼ながら、フリーガ的な煽りの臭いがしました。私が星野先生のご講演を拝聴するのは、今回で4回目です。「認識」の段階は理解できましたので、そろそろ次の展開が聞きたいです。聴視者の先生方も何となくモヤモヤした焦燥感を感じられていたのではないのでしょうか。私を含め焦燥感の根はそこにあるのではないかと推察致します。実は勝手ながら、星野先生のご著書「人新世の絶滅学」から、先生のご主旨(「認識」以後の「理解」と「対策」^{脚註1)})を推論し、「所感」として本年3月2日に献本頂いた外岡先生宛に述べさせていただきます(岡田■2-3. 岡田■2-4. を参照)。本稿の後に添付いたしますので、ご参照下さい。本音を言うなら、読みが浅く私の解釈が間違っていることを期待しています。なぜなら、先生のご発言は希望のないニヒリズムに徹しられているように感じたからです。先生はご講演の中でも、「自分はニヒリストではない。リアリストである。」と言われますが、希望のないリアリズムはニヒリズムではないのでしょうか。

今回のご発表は「人類は気候危機に瀕しているという事実を認識せよ」という「Perception 認識」のレベルの話が主体でした。リスクに対する対策実践に至るプロセスは「Perception 認識」→「Comprehension 理解」→「Assessment 評価」→「Governance 実践統治」というステップを踏んでいくというのが私の主張です。これに従えば、「Perception 認識」はFirst step でリスク管理プロセスのトリガーであり、これがなければ何も始まらない最も大切な行為ではあるのですが、そこがゴールであってはならない。そこで終わるのなら頭でっかちの単なる傍観者に過ぎません。もちろんこれは杞憂であり、ご著書の当為は、むしろ「思弁的空無実在論」を主張する哲学的理解(Comprehension)が主でそこから導き出される対策(Governance)にも触れられています。哲学的考察は今回の講演に回されると言うことでした。そのためか、今回は(過去3回に引き続き今回も)気候危機の認識論(Perception)に傾注され、それ故の発言だったのかも知れませんが、哲学そして対策を全否定されました。ご本人はその意思ではなかったかも知れません。ご著書の中で虚無的ではありますが「希望を見つけるべく」展開されていますので。しかし、今回の録画をやや客観的に視聴させて頂いた限り、そのようなニヒリズム的印象を受けたことは、お伝えしておいた方が良いのではないかと思った次第です。以下、各先生との意見交換の中で印象深かった点について私の感想を記載いたします。

—

脚註1: 私が常日頃提唱している型(パラダイム)を得るための思索プロセス(PCAG ステップ)を言う。第1ステップ「認識: Perception」、第2ステップ「理解: Comprehension」、第3ステップ「評価: Assessment」、第4ステップ「実践: Governance」。なお管理(マネジメント)でよく言われるPDCA サイクルは、PCAG ステップの評価(Assessment)の段階で繰り返されるべきサイクルと位置づけている。

★熊澤先生: 哲学的解釈についての質問

熊澤先生からの「全圏域の存在の主体は何か? 生物体としての人間から他の何モノか(たとえば機械化された知性等)へ転換する予兆があるが、それに対する哲学的解釈」を問われた質問に対し、星野先生は「哲学は死んだ。絶滅下において、生体というベースのない人類に哲学など必要なし」と断じられました。ご著書の中では第II篇「形而上の絶滅学」と題して200ページ超の哲学整理をされています。趣意は確かにレイ・ブラシエが説く「絶滅ニヒリズム賛歌の存在論」のように私には映っており、そこに希望は全くありませんが、少なくとも哲学完全否定ではなかったように感じております。熊澤先生の質問に対しての回答と言うことで強調されたのかも知れませんが、そこに違和感を覚えました。なお、星野先生の「形而上の絶滅学」に対しての私の反論は「絶滅学所感(岡田■2-4.)」に記載しておりますので、併せてご参照頂ければ幸いです。

星野先生のご著書中(第11章・人新世の絶滅学「絶滅哲学の構想」)で「絶滅の哲学の全否定」をあえて「人類滅亡の闇を浮き立たせる哲学」こそ絶滅の哲学が目指すべき途と説かれているのであれば、私は、外岡先生の「絶滅途上の哲学はあるべき」とのご意見に完全同調する者です。絶滅の悲劇はその絶滅にあるのではなく、絶滅途上の弱者狙い撃ちにあるところだと思うからです。本研究談話会でも私の研究紹介で現行の「被災者生活支援法」と「耐震補強促進法」は弱者を切り捨てているという問題点

を指摘しています。また、L2 津波に対する国交省の対策指針が「避難重視」にあることに対して、避難できない弱者を見捨てる反 SDGs 対策と提言し続けています。まずは弱者を救うこと（リスク格差の平等化）を絶滅の哲学でも主張すべきことだと思います。

また、熊澤先生が指摘された「存在の主体」に関する哲学的考察について星野先生は触れませんでした。それに対する私の見解を川崎先生のご意見の欄で簡単に述べてみたいと思います。

★神田先生・鈴木様：人類の均衡点についての意見

神田先生や鈴木和雄様の指摘された「CO₂濃度は世界人口に比例するのだから、絶滅に向かう途中で均衡点が生まれるのではないか」という意見に対して、星野先生は「人類生存不可能な環境に突入した現実を見よ。」とさらなる例を示すのみで、直接的回答を避けられました。確かに、地球環境が「正のフィードバック」を発生するのであれば、人口が減少傾向に至っても、CO₂濃度の加速傾向は止まらず地球環境均衡点は生まれません。しかし、地球圏は「負のフィードバック（コールドアースから温暖気候に戻る）」は古気候学において実証されていますが、「正のフィードバック」についてはその脅威は多くの研究者が指摘しているところですが、まだ経験しておらず、否定的研究者も多くいます。私の立場は「人類の避け得ない潮流」の一つが一種のバランス保存であり、享乐的楽観主義人間もいれば警戒警鐘的悲観主義人間もいるので均衡点を無意識に探っているのではという立場です。この点についても「絶滅学所感（岡田■2-4.）」で述べています。

★佐久間先生：解答のない命題を考える意味についての意見

佐久間先生からは「解答のない命題を考える意味について」、示唆深いご意見提示がありました。星野先生がプレゼンの冒頭で「この問題に解答はない。」と結論づけられたことに対するカウンターパンチであったと思います。人類絶滅をアジェンダで終わらせないためのヒントであり、私も星野先生のご講演を伺う度に同様の問題意識にたどり着いていました。仮に正解はなくとも解答を探すスタンスは必要だと思います。これに対する対論は、佐久間先生と外岡先生との間でなされ、佐久間先生は価値観の転換を解の一つに挙げられていました。星野先生のご講演の中に「人類・文明の外」の思考拠点という図があり、現在は人間圏が地球圏を包含支配しているが、これを地球圏が主体となり人間圏を客体として扱う思考認識になれば絶滅から逃れられるのかもしれない、と星野先生は示唆されました。正しいとは思いますが、この考え方は極端に走ると正に「Deep Ecology」に辿り着きます。その主張は「人間的経済圏で生態系を捉えるのは浅い（shallow）生態学であり、人間の“生”は他の生物圏や環境から与えられているのだから、人間中心主義は非才浅学である」。生物圏・環境圏・鉱物圏等々すべて（深い（deep）生態学）が平等であるべき道徳倫理すなわち人間否定のみを許容する道徳的一元論に陥る危険性もはらんでいます。詳しくは「絶滅学所感」の補足メール（岡田■2-5.）を参照ください。

★川崎先生：未来世代への責任論についての意見

川崎先生からのご意見として「温暖化を忌み嫌う理由は絶滅にあるのではなく、我々の行いが我々の子孫に悲劇を味わわせるから」という示唆に

富む提示がありました。しかしこの問題設定は本質的には、子や孫というのは未来世代の一例に過ぎず限定することなく「未来世代の人類への責任を現世代の人類が負う必要があるか」という命題であり、これは「未来世代の絶滅に現世代人は責任をとる必要があるか」という命題と同意であると思われます。責任の有無やその解決は利害関係者の間での合意形成によってのみ、民主主義的解決を見ることができません。よって、旧来からの倫理学では「責任は同時代人の間でのみ存在する概念」と言うことができます。現世代人と未来世代人が遭遇することは一般的にはないので合意形成上での責任のとりようがない。このとき、未来への責任を正当化するには「未来世代人の存在は“善”なるものであるとの前提を持ち込む必要があります。しかしこれは、現世代人が未来世代人の存在の価値を認めるという、存在価値の没価値性に反する哲学的違反行為になってしまいます（価値とは本来的に主観的判断によるものであり、価値の善し悪しは好き嫌いの判断と同レベルであり哲学で論じるべき対象ではないと言うこと）。よって、未来への責任を正当化するためには、「存在すること」に普遍的価値を見いだすことが可能な存在論、すなわち全く新しい「存在の価値論」を作り上げる必要が出てきます。

川崎先生の発言は、「将来の存在」に対する現存在の「未来への責任」を問いかけた「人類が存在し続けることに価値はあるか、換言するなら人類絶滅は受け入れる価値のないことなのかを問うている」非常に深い哲学的示唆であると思います。佐久間先生も「絶滅は悪いことなのか？」という同様の疑問を呈されていました。熊澤先生が星野先生にぶつけた「生存の主体」に関する質問に対して、私は「主体の生存の価値判断」という観点で議論を深めるべきとの意見です。

★岡田からの質問：「自然共生／連帯生存」文明モデルについて

星野先生のプレゼンの最後に新しい文明モデルとして「自然共生／連帯生存」文明モデルを提案されていました。その説明の中で星野先生は「戦時中の生活レベルに戻れ」と言われました。イモを食べて生活する自然共生の農耕回帰モデルです。しかしこれで人間は Well-being の状態を維持できるのでしょうか。WHO が掲げる Well-being とは「健康とは身体的・精神的かつ社会的に全てが充たされた状態で、単に病気ではないことを意味するのではなく、人間としての尊厳及び生活の質が十分に確保された状態これを Well-being の状態という。」と定義しています。これを維持できる文明モデルであるなら、キーワードを羅列するのではなく、その成立要件をもう少し具体的に展開して頂きたいと思いました。逆に、Well-being 状態を否定する人間の生き様を主張されるのであれば、残念ながら、人間が生存し続けることの意味をどうやって見つけ出していか「人類は「人間らしく生きる」という属性を失うのだから、なぜ人類絶滅の危機を煽る必要があるのか」、という新しい命題が発生します。これに星野先生はどう答えられますか？

星野先生は、他にもいくつかの文明モデルをご著書の中で提案されています。それらについてもいくつか疑問が残ります。詳細は「絶滅学所感（岡田■2-4.）」をご覧ください。

（次ページから星野先生のご著書「人新世の絶滅学」に対する、岡田の所感）

■2-3. 岡田→外岡:星野克美著「人新世の絶滅学」所感をしたためるにあたって(岡田■2-2.に添付のファイル)

外岡先生

星野先生の書籍、有り難うございました。

ざっとですが、一応目を通してみましたので、現時点での所感を送らせて頂きます。

面白かったです。そして考えさせられました。添付文(岡田■2-4.)

は、どちらかというとな否定的な感想のみをしたためたものとなっていますが。

著者とほぼ同じ認識ではあるのですが、将来への目線に若干の違いがあるような気がしました。

今後とも、当方の認識の甘さの叱責をよろしくお願い致します。

岡田成幸

■2-4. 岡田→外岡:星野克美著「人新世絶滅学」所感(岡田■2-3.に添付のファイル)

2023年3月2日

分厚い大著でもあり、各章を精読したわけではなく全体を俯瞰する読み方に留まっていますが、著者の言わんとするところは一応自分なりに理解できたような気がしております。

僭越ながら、私がまだ哲学を知らずにいた高校生から大学1年次生の頃に抱いていた人間不信観(宇宙は結局は消滅の宇宙論に従うものであるから人類はいずれなくなる。それなのに人間中心主義のキリスト教的世界観で動物界の頂点に立っているという傲慢さが許せないという正義感)に似ているような感想を、まず持ちました。否定的意味ではなく、ちょっとした懐かしさを覚えました。今流の言葉で言うならば、当時の私は正に実在論の「人類絶滅ニヒリズム肯定派」であり、著者・星野氏に諸手を挙げて賛同していたような気がします。

ただし、今はちょっとだけ違います。これまで表明してきたように、私のよって立つ位置は「避け得ない潮流肯定派」です。レイ・ブラシエがいうように、絶滅のニヒリズムこそ現実の真理(生は絶滅により生まれるものである)、宇宙の根拠は無であり、よって哲学は絶滅のオルガン(道具)である。すなわち、思考が存在する意義は生が絶滅するからだ、と位置づける。賛同します。しかしここまで強烈なニヒリズムには与しません。人類は確かにあぶない面(絶滅を希求してしまうほどに享乐的側面)を持つが、一方でそれに警鐘を鳴らす良識的保守派も一定数います。このバランスが人類の未来を決めるというメカニズムが避け得ない潮流であり、自分はその考えに一番近いのです。言ってみれば、なるようにしかならない。これは正に老子の思想だと思っています。

この観点で星野論理を見つめるなら、確かに本著作は『「人類・文明の絶滅」という内容なので、こうした内容を思考し執筆することで、筆者自身も絶望感を感じたこともあった。』と記述しています。止めることのできない人類絶滅への道(CO₂による温室効果)の収斂する先は「人類絶滅」以外あり得ないとの結論です。しかも、『人類絶滅が宇宙原理に根ざしていることに気づくなら、自らの死に臨む間際において寂静涅槃という思いに至ることが望まれている・・・』と結んでいては、確かにこれは絶滅ニヒリズム賛歌の実在論と取られかねないところで終結しています。

終章は救済について述べていますが、それまでの記述が、哲学者たちの思想を絶滅学との関係で統一的に解説した緻密な論理構成であったのに比べ、これは付録のような気がしました。目指すべきユートピアとして5つ提案されています。

①脆弱性のユートピア。これは筆者も否定しているように、工業文明をさらに推し進めての現状打破を目指すモノで、工業文明に依存している以上、脆弱的解決策と指弾しています。

②復元性のユートピア。科学革命以前の文明拒絶型伝統的農耕共同体の復活を目指すモノで、地域の生態系と共生できるため、復元可能性を持つと指摘していますが、どうでしょうか。世界人口80億人をこの共同体で養えるとは思えないのです。結局は近隣の共同体どうして食糧の略奪戦争が始まり、世界人口を半減にする方法を導入するしかない。これは人種の選択戦争を意味します。

③レジリエンスのユートピア(国連推奨型共同体、自給自足型市民共同体)の試行。しかしこれら共同体も恐らくは、維持するのに工業技術に依存せざるを得ないから結局は、脆弱性ユートピアと同じ運命にあるような気がします。

④廃棄物利用型共同体。利用すべき廃棄物はどうしてできるかといえ、工業文明が生み出しているのだから、筆者の主張は矛盾している気がします。

⑤超越性ユートピア。これを目指せと強調していますが、共同体を構成する住民が良識ある道徳的倫理観を有していることで成立する共同体をいつています。アダム・スミスの道徳感情論に記述されている「経済的フェアプレイが成立する世界」と同じことだと思います。人間は自分の内に公平なる観察者を育て、善悪を判断する利他的な正義と慈恵に関する二つの一般的ルール(①他人の生命・身体・財産・名誉を傷つける行為を行わない、②他人の利益を増進する行為を行う)を身につける、その結果として経済的フェアプレイが成立する健全な社会が実現するはずだと唱えましたが、そうはなりません。

著者が一番言いたいことは、どのみち地球は宇宙論に従い絶滅する。しかし現人類は自らの手で絶滅への道を加速している。これに気づけ、と言いたいのでしょう。しかし人類はこの身もふたもない終末的事実は知っているはず。この絶滅終末に意味づけする必要はあるのでしょうか。実在論を極めた哲学者に自死が多いのも頷けます。自らの立てた命題に答えがないからです。

十分に読みこなしてはいませんが、多くを考えさせられる著作でした。このあたりの議論は、4月の研究談話会で触れてみたいと思います。

■2-5. 岡田→富樫、大塚:2023年4月18日の第2回星野先生講義の感想 ~Deep Ecology に対する補足~

研究談話会のかつてのメールのやりとりに関連する意見表明(Deep Ecology)を見つけましたので、「絶滅学所感」への補足としてここに再掲します。

差出人: OKADA Shigeyuki <okd@eng.hokudai.ac.jp>

送信日時: 2023年4月24日月曜日 18:01

件名: RE: 岡田先生、大塚先生、追加、23.04.23

富樫先生、大塚先生

岡田です。

・・・(前略)・・・

お二人のやりとりの中で、ちょっと気になった表現があったのでメモ書きします。

「人間がいなくなった方がよいのでは？」という箇所です。星野先生のプレゼンの中でも、そうと思われるニヒリズムの発言があったことに、ついつい反応してしまったのですが(星野先生の話を最後まで聞くと、言いたいことはそうではなかったのだ(ユートピアの創出)と納得はしましたが)、地球環境問題の一つの行き着く先が「Deep Ecology」だと思います。その主張は「人間的経済圏で生態系を捉えるのは浅い(shallow)生態学であり、人間の生は他の生物圏や環境から与えられているのだから、人間中心主義は非才浅学である。生物圏・環境圏・鉱物圏等々すべてが平等であるべき道徳倫理(すなわち深い(deep)生態学)に基づくべきであり、人間が生態系を破壊する根源であるのだから、この環境に人間が存在するのは否定されるべきである・・・」と展開していきます。しかしこの考え方は道徳的一元論であり、環境ファシズムとも言われています。要は、人間否定の一つの道徳観しか許容しない一元論であり、環境のためなら人間抹殺もいとわないというある意味で「健康のためなら死んでも良い」というパロディに近いところまで突走っていく人もいます。私が納得できないのは、その一神教に近い宗教観です。一元論はとも考えやすく、論理的(観念的?)思考も容易なのですが、そこにとらわれることに拒絶を感じてしまいます。と言いつつ、私も何らかの哲学にとらわれているのかもしれません。

そのような思いが、私の発言の中にそのまま表出してしまい、私自身の言動が誤解されることもあり、発言すること自体に躊躇を感じることもあります。幸いに、この研究談話会は思考キャパシティの大きな方々が多く、誤解を恐れずに発言させてもらえる雰囲気があるので、安心して参加させてもらっています。

・・・(後略)・・・

岡田成幸

Ⅲ. 倫理学と哲学の棲み分け

■3-1. 川崎一朗→岡田:川崎氏へのコメント(岡田■2-2.)に対する補足 2023年12月2日(土) 19:03

岡田様

「録画視聴の感想」、大変興味深く拝読しました。一点、コメントさせてください。

私は単純に未来世代と書いてしまいましたが、地球沸騰化は、私と孫にとってほぼ同時代の問題となってしまったという点です。私は孫たちの顔を思い浮かべながら先のメールを準備しました。

川崎一朗

■3-2. 岡田→川崎:哲学と倫理学の棲み分け(川崎■3-1.)への返信 2023年12月2日(土) 22:18

川崎先生

コメント有り難うございます。

先生のご発言とその心情は十分に理解できます。先生のご発言は倫理学的命題と理解しました。自分自身に関わる方々への思いがあるからこそ、倫理学は研ぎ澄まされていくものだと思います。

一方で、哲学は客観的真理の追究にその存在価値があります。

ある意味で哲学は冷徹です。

自分自身の経験から来る感情や宗教・イデオロギーに左右された思考形成は哲学分野ではあってはならない。その経験のない人や宗教・イデオロギーに賛同しない人に対して説得力を持たないからというのが、哲学者の取る立場です。

客観的判断を下すのが哲学者であり、好き嫌いの判断を持ち込んでは哲学にはならない。これを研究者(哲学者)の「方法論的態度」としての没価値性と言います。

そして同様に研究対象に感情を持ち込んではいけません。これを「存在論的テーゼ」としての没価値性と言います。あくまでも普遍的真理を追求するのが哲学なのだとすることのようです。

倫理学と哲学は別物であり、こうあるべきと言う“当為”を語るのが倫理学であり、哲学はあくまで現象の論理学なのです。

一番わかりやすい例として、原子爆弾があります。原子爆弾を「人を殺す道具」という目的に照らすならば、哲学的考察に依れば、「人を殺す」という目的に対して、効率的な道具であるので有用と判断されます。人を殺すことが良いかどうかはそれを判断する人の主観的価値観(時代性、社会性、敵対関係性、自己防御の正当性等々)で決まるものであるため、殺人の良否は哲学的には「存在論的テーゼ」として没価値性であると判断します。人を殺すことの良否の価値は倫理学で問うべき問題だということですが。

私が川崎先生の発言からインスパイアされたことは、あくまでも哲学という範疇での話でした。川崎先生のご指摘は、倫理学的に重要な指摘と考えております。私も、「未来世代人に対する現世代人の責任の非回避義務」は、環境危機に何の責任もない弱者たる子や孫を自分たちと同世代人と見なすことで、より説得力を増す言論となるのではないかと思います。

岡田成幸

■3-3. 橋美知子→富樫:美術教育学からの絶滅学に関するコメント 2023年12月3日(日) 22:51

富樫様

橋です お電話有難うございました。ミュート解除操作失敗の埋め合わせをお届けいたします。専門は美術教育学です。創造的意識体験を促す美術・工芸教材の開発・研究がライフワークです。絵の描き方とか技術の伝授ではないです。小学生から大学院生や社会人まで個々の人が交流を楽しむことで自己発見のセンサー＝美意識を育てる術を取得することが願いです。

今日の感想ですが、私は始めに終わりを想う＝死を想定して生きることが肝要と思います。以前「芸術と社会」という教育学部での観賞教育の講義を「100万年後」という映像紹介から始めた意図もそこにありました。100年後1000年後とズームアップして世界が崩壊していく様はゼロから創造が開始される過程の真逆を辿ります。何を読み取るかは鑑賞者の立ち位置次第。そこから個々人の問題意識を毎週成長させていくレポートを作成

していきます。自己と外界との関係を俯瞰することで座標軸レポートが生まれていく過程です。金と宗教というフィクション、そして子孫への執着から免れた境地に何を発見するかは人様々。

■3-4. 岡田→橋、富樫:討論メールの皆さまへの配信依頼

2023年12月4日(月) 15:15

富樫先生

CC. 橋先生

岡田です。

橋先生の感想をお送り頂き有り難うございます。

ゼロからの創造とは真逆に、死(=絶滅)から創造を辿るプロセスもあることを知りました。

美術(美学)の自由さ(非束縛性)に羨望の思いがわいてきます。美意識がそこにリンクするのであれば、絶滅学にも希望の光が見えそうな気がします。

富樫先生

CC. 川崎先生

添付のやりとり(川崎■3-1. 岡田■3-2.)は、川崎先生とのメール交換です。星野先生のプレゼン感想補足から、「倫理学と哲学の棲み分け」に発展し、少しだけ話させてもらいました。

もし、川崎先生のお許しを頂けるなら、研究談話会の皆様(特に熊澤先生)のご意見も拝聴したく、皆様への転送をご検討頂けないでしょうか。

岡田成幸

IV. 古気候学からの正のフィードバックに関する説

■4-1. 神田順→岡田:星野絶滅学に対する岡田のまとめ(岡田■2-2, 岡田■2-4.)に対するコメント

2023年12月5日(火) 15:07

岡田先生

全体の議論を、岡田先生の見方で整理していて、星野先生が、危機的状況であるという強い警告に対して、その実態を知った上で、「やはり我々のすべきことはあるだろう。それを議論しよう」、というように拝見しました。確かに我々は、そのために議論しているのだと思います。CO₂の排出が気候を危機的状況にしている元凶は先進国であり、海面上昇や気温上昇で生命の危険を被りやすいのは途上国であるという現実の中で、政治的に何ができるかと捉えると、日本ほどのんびり構えている国も少ないということではないでしょうか。私としては、ゼロ経済成長を基本とする行き方に、絶滅するとしても、少しは長引かせる可能性を感じるのですが、いかがでしょう。まだまだ、この議論は続くことになると思うので、楽しみにという意味でも、今回の岡田先生のまとめは、大いに参考になるように思いました。有難うございます。

神田

■4-2. 岡田→神田:古気候学からの正のフィードバック

2023年12月6日(水) 15:11

神田先生

コメント有り難うございます。私の言い足りなかった部分を十分に補足して頂き、有り難うございます。自分の感想文を読み返してみて、勢いに任せて星野批判一辺倒になってしまっていることに、気がつきました。私の趣旨は、神田先生がご指摘のとおり、『星野先生が、危機的状況であるという強い警告に対して、その実態を知った上で、「やはり我々のすべきことはあるだろう。それを議論しよう」、というように拝見しました。』そのとおりで、先の展開の議論を続けることを主張したかったのです。

また余計な一言になってしまうかもしれませんが、星野先生のお話が人類による出力の話(経済環境学)であったのですが、それを受け入れる地球の懐の大きさ(CO₂の地球への入力)の話は古気候学者がしています。そのさわりを少しだけ記載します。気候学は全くの素人のため理解が十分ではなく、誤ったことを書いているかもしれません。

気になったのは、星野先生の第1回のレクチャーで指摘されていた「正のフィードバック」です。一度ある傾向が加速し始めると、それを留める要因が働かなくなるというものです。地球はこれまで、「寒冷化」に関しては何度も正のフィードバックを経験してきました。そしてその要因を押しとどめる負のフィードバック(炭素循環)が必ず働き、現在に至っています。「気温上昇」に関する正のフィードバックの代表例が、金星にあるとされています。金星が現在、CO₂の厚い大気に包まれた高温高圧の灼熱惑星である理由は、太陽からの距離にあるのではなく、月がないことによるのが最大因であるという説です。かつて金星も地球と同じ海があったと言われていました。しかし月がなかったために潮の満ち引きが生ぜず、DNA合成による微生物誕生に至らなかったと言うことです。そのために、大気中のCO₂を取り込み海中に送り込むCO₂循環が起らなかったために、CO₂濃度が一方的に増加し、現在のような高温高圧の惑星になったと言うことです。金星に人類は出現しなかったのももちろん人為的温暖化によるのではなく、金星内部の炭素を火山活動等により大気放出するメカニズムが大気中の炭素を地下に固着するシステムよりも影響の大きな化学反応であったため灼熱化してしまった訳です。

一方地球は、確かにCO₂濃度が上昇しつつあります。その原因が人類の経済活動にあるという説も有力です。しかし自然界のポテンシャルは人類以上に巨大なのではという説にも耳を傾けたいと思っています。このまま正のフィードバックに突入していくのかどうか、若干の疑問を感じているからです(この辺に触れてしまうと、環境系の方々に総スカンを食らってしまうのですが、私は全方位からの話を伺いたいと言うことであり、まだ自分の立場を決めるほどに理解が追いついていないと言うことです。)

地球環境の話に戻るなら、古気候学からの話として多田隆治著「気候変動を理学的に(みずす書房、2013)」に詳しいのですが、地球上で一番大きなCO₂貯蔵庫は海洋深層で陸上(610Gt)と大気(750Gt)を合わせた30倍の容量(38100Gt)を持っています。そこにCO₂を運び込む化学作用が生物ポンプ・アルカリポンプ・溶解ポンプで、その化学作用の主役はプランクトンです。大気中のCO₂を取り込んでプランクトン(有機物)が繁殖し、それが死んで海中に沈下していく過程で深層海洋中に炭酸ガス放出及び海底に沈殿するプロセスが大気中のCO₂削減に大きな役割を果たしていると言うことです。植物が枯れた化石燃料も多くのCO₂を保有していますが1580Gt程度であり、人類が掘り出して大気中に放出する速度は先の化学反応に比べ非常に速度が遅いため、かつて地球が経験したダンスガードオ

シュガーサイクルのような急激なCO₂濃度変化を研究している古気候学者は、意外なことに人類による影響をあまり相手にしていません。そうは言っても、月も地球からどんどん遠ざかっていますので、いつかは月の引力が潮の満ち引きに影響しなくなる時は来るのでしょうか。その時に、生物が大絶滅していたなら、大気中のCO₂を固着する新たな海洋生物誕生は期待できなくなるかもしれません。

いずれにせよ、古気候学者はこれまで経験してきた地球の気候を説明するモデルを実証的に研究するスタイルをとっている研究派閥が多いようです。すなわち地球の全球凍結に至るサブシステムが発動することによる寒冷化に向かう正のフィードバックです。これまで経験したことがない気温上昇に関する正のフィードバックが働く地球のサブシステムがないとは言い切れないことは確かです。我々の経済活動がプランクトンを死滅させてしまうのかもしれないし、深層水大循環を停止させてしまうのかもしれない。しかしそのようなメカニズムモデルはまだ科学的に提案されていないようです。因果関係を突き止めることなしに、単なる相関関係で議論することは「海賊の減少が地球温暖化に寄与するという非科学論争（最近のSNS上で話題の、太陽光発電の建設がアーバンベア増加に関わっているという風説）」に通じる統計学的禁止行為です。

炭素循環に関する物理学の話を一度伺ってみたいです。古気候学のような入力のみではなく、また経済環境学のような出力のみではなく、両方の話ができる方をご存じありませんか。

岡田成幸

V. 哲学と倫理の分水嶺

■5. 熊澤栄二→岡田:岡田■2-2. を受けての議論開始

(以下の熊澤先生の原稿をお読みください。)

本報告書(災害と社会に関する広域的研究論文集VOL.3, 2025年11月),
第I編 論文・総合 4. 哲学系

熊澤栄二・岡田成幸: 哲学と倫理の分水嶺.

[了]